

橋本先生を悼む

宗 形 舞

先生に初めてお会いしたのは、私が大学二年の時、イギリス文学史の授業においてでした。英文科の学生なのだから、シェイクスピアのことを少しは知っておかないか、と思ったのが先生の授業を取った動機でした。あの頃の私は、大学院への進学など考えてもおらず、まして自分が、橋本先生が最後に受け持った大学院の学生になるだろうとは、思ってもいませんでした。

先生がお亡くなりになったのが、二〇〇九年二月十五日。そのひと月ほど前、病院で、お見舞いの時にお会いしたのが最後となりました。先生の無精ひげ姿をみた学生は、私だけだったはずですよ。

橋本先生にとって私は、手のかかる生徒だったと思います。「宗形は、返事だけは良いんだよね」と、よく言われたものです。週二回ある授業の課題をこなすのも大変で、論文が全く進まなかった私に、先生は根気よく、授業を続けてくださいました。論文を書くことだけに集中していればいいものを、それがうまく出来ずに余計なことばかり気を取られて悩んでいる時も、先生は、私の話を静かに聞いていてくださいました。

ゼミの学部生と一緒に参加した合宿。楽しそうに話していた先生。英語英文学科で行われたスピーチコンテ

ストにて、橋本ゼミとして初めて劇を披露した日。今にして思えば、秋から冬にかけて先生は、ずいぶん無理をして大学へいらしていたのだな、と強く感じます。

橋本先生には、何度「なんたるっ！」と言われたかわかりません。橋本先生に教わったことのある学生にとっては、おなじみの言葉です。自分で文章を書くときはもちろん、研究室で勉強をしているとき、例えばこんなとき、先生ならばなんと言うかな…と考えることがあります。先生が入院されてから二度、お見舞いには行ったものの、先生の研究室のドアが開いたままなのを見られない日が、こんなに早く来るとは思ってもいませんでした。

先生がいらっしゃらない今、私に出来ることは何なのか。やはり、修士論文をしっかりと仕上げて無事に卒業することが、先生への恩返しになると思います。そして、映像翻訳者になるという私の夢を実現させること。その二つの報告が出来るように力を尽くします。

橋本先生、ありがとうございます。これから、見守っててくださいね。